

授業内容の充実と 認知負荷低減の両立の試み

鹿内 勇佑

東京農業大学応用生物科学部助教

はじめに

私の専門は植物栄養学で、農芸化学科に所属している。農芸化学は明治期からあり、農業や食品に関連するあらゆる事物を化学的に解析していこう、という分野である。国公立問わず農芸化学系の学科全般に言えると思うが、本学科でも食品に興味のある学生が多数派である。とはいえ、主食や野菜はもちろん、動物性食品でも食物連鎖をたどれば植物の光合成に行きつくこととなり、安定した食料供給には植物の知識は必須である。

本稿では、私が現在担当している座学の講義（1年生の「生物学」「分担」、3年生の「肥料・植物栄養学」「分担」、「作物学」「単独」、いずれも履修者は100〜200名規模）で、留意している点を、特にMicrosoft

PowerPointの使い方を中心に紹介していく。私は話術が巧みでも、魅力溢れるタイプでもない。どちらかといえば淡々と講義を進める方である。であるからこそ、せめて講義資料に注力する、という方針を採ったのである。

1. 資料のデザインは統一する

デザインがバラバラなスライドを練り出されたら学生は混乱してしまう。そこで、全てのスライドの設定を統一し、上にタイトル、左に文字、右に図やイラスト、という配置を基本パターンにしている。どのスライドも同様の配置にすることで、履修者の認知コストを下げ、内容に集中してもらえると考えたためだ。スライドのデザインを固定化すると、講義資料を使って後ほど自学しようとするときに、「内容を理解しにくい資料」になってしまう可能性を下げる、という狙いもある。

2. 目次スライドで浦島太郎に優しく

いろんな事情で人は上の空になる。例えば、やむを得ず講義中に「5分だけ仮眠」のつもりが5分経っている場合もあるだろう。そんな、今がいつかわからなくなっ

た浦島太郎さんたちをお助けするのが、目次スライドである。話題の切れ目に、階層化した目次のみを映したスライドを随所に挟んでいく。これから話そうとする項目を目立たせておけば、仮にそれまで意識が竜宮城にあったとしても、21世紀への復帰が容易になる。

3. アニメーションでお上品に情報をいただく

どんなにおいしい料理でも、大量の料理を一気に口に突っ込まれると、ウツとなる。それと同様に、デザインがいかにも優れていても、たくさん文字やイラストを一気に見せられてしまうと、そっと瞳を閉じるほかない。

これを回避するために、小さなスプーンで少しずつ口に運んでいく。最初はタイトルの他にイラストや図を一つだけ表示する。口頭での説明の後、アニメーション機能で文字情報を追加し、更に詳細な説明を繰り返す、というサイクルを設け、これをほぼ全てのスライドに展開する。情報を小出しにすることによって、「今どの部分を見ればいいのか」を迷わせず、履修者の認知コストを下げるようにしている。

4. 講義画面の録画を配信する

Microsoft Teamsなどを使えば、講義の録画は簡単である。私はスクリーンに映写する画面を録画し、後日、履修者限定で配信している。フリーソフトでデータ圧縮やノイズ除去なども簡単にできる。風邪で休んでしまったとき、試験前の復習などに使ってもらえているようである。なお、配信の際には、配信先を学内限定・履修者限定としないと著作権的に問題が生じやすいため注意を要する。

おわりに

授業評価アンケートなどの評判は現状、良くも悪くもないが、何かしらの学習効果があると信じたい。所属学科の学生はまじめな雰囲気であり、講義中は静かで、勉強熱心な人も一定数見られる。このような恵まれた環境にあぐらをかいていると一笑に付されてしまえばそれまでだが、受講生が「この講義を受けて良かった」と思える内容にしたいという熱意を持っている。これが私の教員2年目の現在地である。

甲南大学グローバル教養学環 ・ 野村 和宏「グローバル教養学環長」

新たなグローバル教育「STAGE」の始動

はじめに

多様な価値観が錯綜さくそうし、将来を予測することが困難になった現代社会では、文化や言語の壁を越えて世界の人々と協働し、さまざまな課題解決に取り組むことができる人材が求められている。そうした社会的要請に応えるべく、甲南大学は新たな教育課程を編成。文部科学省が定める「学部等連係課程制度」を活用して、多種多様な学問を越境的に学ぶことで、学生の「グローバル教養」の素地を養う。その目的を実現させるため、2024年4月に始動したのが、グローバル教養学環グローバル教養学位プログラム「STAGE」である。

本稿では、「グローバル人材」として社会の第一線で活躍する人物を育成するために「STAGE」が取り組んでいる教育活動について述べる。

1 甲南大学のグローバル教育の歴史

甲南大学は、創立者である平生 夙三郎が掲げた「人物教育の率先」を教育の理念として継承し、学生一人一人の天賦の才を大切に伸ばすことに長年にわたり力を注いできた。大学全体として推進している「彩り教育」はその教育活動の一つであり、学生の興味・関心に柔軟に対応するために、所属学部を問わずに学ぶことができる彩り豊かな科目群やプログラムを展開している。中でも「グローバル教育」は、甲南大学の歴史とともに進化してきた特別な教育プログラム。その歴史は古く、1976年に開設された「甲南・イリノイセンター」までさかのぼる。同センターは、現在では「国際交流センター」に生まれ変わり、留学プログラムの開発や、国際交流の拠点Porte（ポルト）の新設など、甲南大学のグローバル教育の中枢を担っている。2015年からは、全て

の学生がグローバル教育に参加できる「融合型グローバル教育」を開始。「よりグローバルに学びたい」という学生の熱意に応えるべく、23カ国149校から選択できる充実した留学制度や豊富な国際交流イベントを用意している。この教育プログラムを通じて、学生は「グローバル人材」になるための素養を培い、多くの卒業生が国際社会で活躍している。

2 グローバル教養学環「STAGE」の誕生

これまで取り組んできたグローバル教育の伝統と実績を引き継ぎ、甲南大学はさらに革新的なグローバル教育を展開する。それが、国際社会で通用する能力や、グローバルな視点や経験を有し、地域社会や経済の活性化ならびに持続的発展に貢献できる「グローバル人材」の育成を目的に開設された、グローバル教養学環「STAGE」である。「STAGE」とは、英語名称「Special Track for Accelerated Global Education」の頭文字を取った略称で、文部科学省が定める「学部等連係課程制」に則した学部に並ぶ組織。総合大学である甲南大学

の強みを生かして、学部やセンターなどの諸組織や海外の協定校、そして企業・地域社会と連携することで、充実したグローバル教養の学びを提供している。グローバル教養学環の学生（以下、STAGE生）は、この学びの「環」の中で、「グローバル人材」として必要な力を修得し、世界基準で考え社会の第一線で活躍することが期待されている。

3 STAGEでの魅力ある学び

STAGEでは、1学年定員25名の学生に対して11名の専任教員がアカデミックアドバイザーとして手厚く指導に当たる。学生一人一人の個性に寄り添いながら、つまずきやすいところは丁寧にカバーし、得意なことはさらに伸ばすためのサポートができるのは、少人数制教育を採用しているSTAGEならではの特長である。

STAGEの学びの特徴として、1年次から4年次まで続く「STAGE演習（ゼミ）」がある。多くの大学・学部では3年次から専門性を深めるゼミに所属することが一般的だが、STAGE生は入学時から卒業まで必修

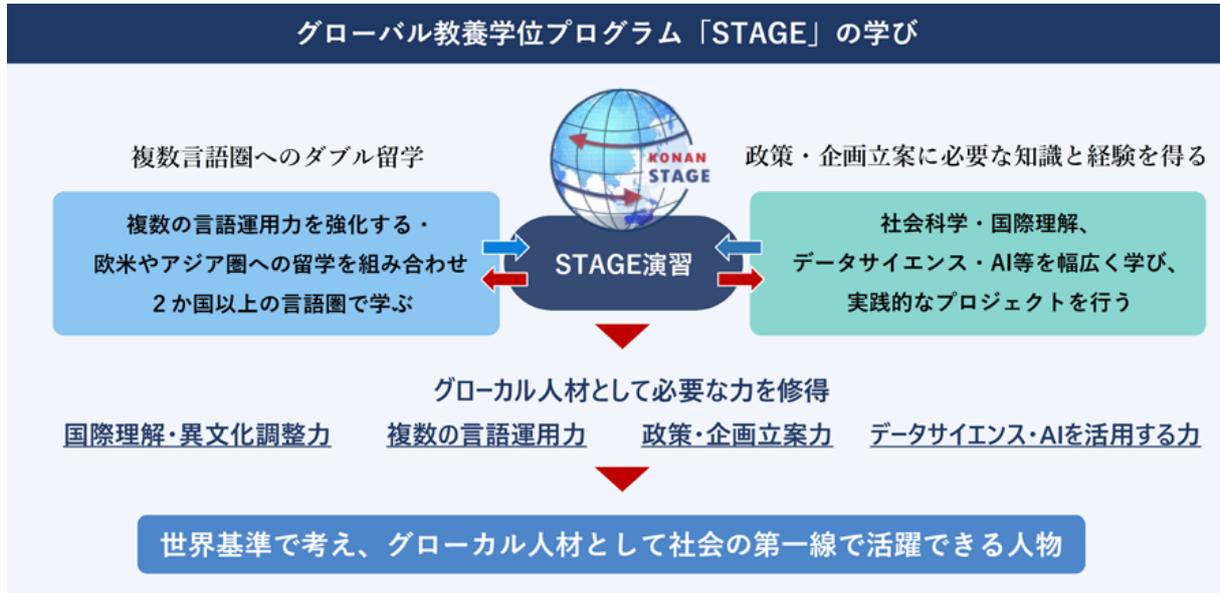


[写真1]STAGE生と教員陣の集合写真

科目として受講し、11名の専任教員の専門分野である「持続可能な社会（SDGs）」「地域創生」「異文化間コミュニケーション」「グローバルイシューズ」「グローバルビジネス」を1年次から幅広く学ぶ。2年次には興味のあるテーマを学生自身が選択し、自律的に知識を追究することで、グローバル教養を深める。ゼミに加えて、STAGE生は文理横断的な科目も学修する。社会科学（経済学・法学・政治学・経営学）・国際理解（異文化理解・国際問題など）やデータサイエンス・AIなどの学修を通じて、国内外の社会問題を多角的に考察する習慣を早い段階から身に付けて、課題解決のための企画立案・提案力を養う。

もう一つのSTAGEの学びとして、複数言語圏への「ダブル留学」があり、大学在籍中に留学に2回行くことが卒業要件となっている。1回は原則半年以上の中長期留学、もう1回は2週間から1カ月程度の短期留学である。ポイントは、欧米やアジア圏などへの留学を組み合わせ、異なる言語圏で留学生生活を体験すること。インターネット社会となった現代社会において、片手にスマートフォンで海外の情報を得ることは容易だ。しかし、

グローバル教養学位プログラム「STAGE」の学び



STAGEでの学びの概念図

光、水、空気や食べ物、人々にぎわっている市場の雰囲気など、実際に現地に行かなければ体験できないことは、まだまだたくさんあるはずだ。さまざまな文化背景を持つ人々と実際に出会い交流を深めることで、言語運用力を高めることはもちろん、複数の異文化に対する寛容性や価値観に起因する問題解決のための能力を修得することが、ダブル留学の意義である。なお、留学先の授業で取得した単位は甲南大学の単位に換算される仕組みとなっているため、留学に2回行ったとしても4年間で卒業を計画できる。

地域や企業が抱える課題解決に取り組む「グローバル実践プロジェクト」は、STAGEでの学びで修得した社会科学やデータサイエンス・AIなどの知識や留学でのグローバルな経験を生かすことができる包括的な科目。例えば、甲南大学がある神戸市ではたくさんの外国人が生活しており、言葉や文化の違いから、日常生活や仕事への支援を必要としている人もいる。そこで、甲南大学が包括連携協定を結んでいる公益財団法人神戸国際コミュニケーションセンター（KICC）などと協力し合い、在住外国人の支援に関わる課題に取り組むことを視野に入

れている。その他にも、企業・自治体との連携や本学の国際交流センターでのイベント企画や外国人留学生との共同プロジェクトなどを推進することで、STAGE生は「グローバル人材」としての経験を積むことになる。

4 学びを支える充実した施設

STAGEの始動に向けて、甲南大学に2つの施設が新たに設置された。一つは、世界とつながることを目的に誕生した「Global Connecting Passage」。この施設では、主に大型LEDモニターを用いて、海外の協定校とオンラインでつなぎ協働で行う「COOL型授業」(Collaborative Online International Learning)を実施している。異なる文化圏に住む同世代の学生同士で行うディスカッションは、異文化学習のみならず、自国の文化に対する新たな発見ができる機会でもある。大型LEDモニターを活用した臨場感ある授業は、STAGE生の活気であふれている。また、授業以外の時間帯にはWORLD NEWSを放映しており、STAGE生は日常的に世界の主要なニュースから情報を収集して、グロー

バルな視野を広げていく。

もう一つのSTAGE生専用の学びの拠点である「STAGE LOUNGE」と「PROJECT ROOMS」は、STAGE演習が行われる主要な施設。充実したAV機器が設備されており、中長期留学に行っている学生もオンラインでSTAGE演習に参加する。また、授業で分からなかったところを教え合ったり、学内の情報を共有し合ったり、学生同士がお互いに助け合い、絆と学びを深



[写真2] Global Connecting Passageでの授業の様子



[写真3]STAGE LOUNGEでの交流の様子

める、特別な交流の場所になっている。

5 将来の展望

甲南大学の建学の精神を体現するSTAGEでの学びを通じて、STAGE生は各々の天賦の才を伸ばし、授業やイベントの端々でそのパワーを発揮している。授業でのディスカッションでは、一つの明確な解答を導くのではなく、それぞれ個性的な意見を持ち寄ることで、互いに刺激し合い学びを深めている。そんなSTAGE生たちに影響を受けているのは教員も同様で、これまでに確立してきた教育観をアップデートしながら、学生とともに切磋琢磨して成長し合える関係でありたいと思う。

このSTAGEは2024年4月によりやく一期生を迎えたばかり。2027年の完成年度には、100名の学生を抱えることになる。同じ学年の学生同士だけではなく、この特別なSTAGEのラーニング・コミュニティの中で、先輩と後輩のつながりを深めて、同じ志を持つ仲間として一緒に、STAGEでの学びの幅をより発展的に広げていってくださることも同時に願っている。